

亡国の吸血娘（五さい）

善太夫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オーバーロード アニメ3期全巻購入特典『亡国の吸血姫』の世界にキノノではなく幼女化したシャルティア『ありんすちゃん』が登場したら……という話です。

まあ、すべてはありんすちゃんが見た夢にしか過ぎないのですが……

目次

ありんすちゃん、出会う

—
1

ありんすちゃん、出会う

ありんすちゃんが地上のログハウスにやって来ると、そこでは戦闘^{ブレイク}メイド^スのユリとシズが何やら悩んでいました。

「どうちたでありんちゆ？ わらわ——わたしが解決してでありんちゆよ。めいたんて、ありんちゆちやがまああるくかいけちゆしるでありんちゆ」

ありんすちゃんは胸をはりました。

「ああ、ありんすちゃん様。実はナザリック宛にこんなものが……」

ユリはありんすちゃんに小さな小包を見せました。大きさは丁度B6サイズ位でドツシリとした重さがあります。

「……爆発物ではない。なんらかの魔法の痕跡もない。だから大丈夫……たぶん」

ありんすちゃんは小包を振ってみましたが何の音もしませんでした。どうやらお菓子ではないみたいです。

ちなみにありんすちゃんの頭を振るとカラカラと音が……ゲフンゲフン。な、なんでもありません。

改めてありんすちゃんは宛名を調べてみました。すると表に『ナザリック地下大墳墓

鈴木悟 様』という宛名書きがありました。

「……えつと、えつと……」

そういえばありんすちゃんは漢字が読めないのでしたね。

「……鈴木悟、ですよ。そんな名前、ナザリックにはないかと……」

「……肯定。ナザリックにスズキサトルというデータは無い。ちなみにスズキゴでもリ
ンボクゴでも登録は無い」

「……ふ、ふーん」

ありんすちゃんはわかったようなふりで誤魔化します。しばらく考え込む様子を見
せていたありんすちゃんはいきなり顔を上げました。

「……こりは『ありんちゅちゃ様』と書いてあるでありんちゅ。ありんちゅちゃを漢字で
書くところなるでありんちゅ」

あ然とするユリとシズを残し、ありんすちゃんは胸をそらせフンスと鼻から息をはく
と小包を手にログハウスを後にしました。

※ ※ ※

ありんすちゃんは屍蟻玄室に戻るとベッドに寝そべり早速小包を開けてみます。中からでてきたのは一冊の本——アニメ・オーバーロード3の全巻購入特典小説『亡国の吸血姫』でした。

ありんすちゃんは本をひろげますが、漢字が多すぎて読めません。そこでシモベのヴァンパイア・ブライドを呼んで本を読ませはじめました。

ナザリツクを出たモモンガは空高く飛び上がります。そして「いくぜ！」というかけ声でたくさんの花火を点火するスイツチを入れます。ありんすちゃんは大喜びです。

つついありんすちゃんは花火代わりに「ヴアーミリオン・ノヴァ」を放とうとしてシモベ達に止められてしまうのです。

次に、いつの間にか廃虚の街にいたモモンガは一人のアンデッドの少女——キーノ・ファスリス・インベルンと出会います。キーノが自分の名前を名乗るシーン——感動的な場面に話があると何故かありんすちゃんは不機嫌になりました。

ありんすちゃんはヴァンパイア・ブライドから本を奪うと「なまえはキーノ・ファスリス・インベルン」の一文の上にバツをつけ、『ありんすちゃん』と書き加えました。

これで主役はキーノからありんすちゃんに変更です。

すっかり満足したありんすちゃんは『亡国の吸血姫』を胸に抱いたままうつらうつら

と眠りにつくのでした。

※ ※ ※

ありんすちゃんが目が覚ますとそこはいつもの屍蠟玄室のベッドではありませんでした。起きあがって辺りを見回してみましたが、まったく見おぼえの無い廃虚の街みないな場所にいるのでした。

もしかしたらまたしても寝ぼけてくしゃみをして「グレーターテレポーターション」を発動させてしまったのかもかもしれませんね。

「……こりはまず、探検するでありんちゅ」

ありんすちゃんはチョコチョコとした足どりで歩き始めました。

街の中ではウロウロするゾンビしか出会いません。ありんすちゃんはしばらくゾンビの真似をして歩いてみましたが、すぐに飽きてしまいました。

ふと、誰かがありんすちゃんを追いかけてきている事に気がつきました。

「……鬼ごっこは大好きでありんちゅ」

ありんすちゃんはキヤツキヤツ言いながら一生懸命に逃げます。

鬼はありんすちゃんの前に回り込むと、ありんすちゃんは勢いよくぶつかって止まり

ました。ありんすちゃんを鬼を見上げるとそこには――

「……アインジユちやま……」

ありんすちゃんはぼうつとしてアインズを見上げます。しかしアインズはありんすちゃんと初対面であるかのように尋ねてきました。

「……こんばんは、星が綺麗な良い夜ですね。幾つか聞きたいのですが……」

ありんすちゃんはコクリと頷きます。

「まずはそうですね。……私は……鈴木悟と言いますが、貴方のお名前をお聞きしてもよろしいですか？」

ありんすちゃんはニツコリと笑いました。

「ありんちゅちやはありんちゅちやでありんちゅ」

「……キーノさん、ですね。……それで早速なのですが、この都市で何があつたのかを教えてくださいませんか？」

ありんすちゃんは首を振ります。

「……ありんちゅちやは5ちやいだからわかんないでありんちゅ」

「……………」

悟は腕を組んでしばらく考え込みました。そしてなにか決断したように口を開きました。

「それで……私は……先程も名乗らせていただきましたが、鈴木悟と言います」

「……違うでありんちゆ。アインジユちゃまでありんちゆ」

ありんすちゃんは否定しましたが、悟は無視しました。

「悟さま、でなくて悟さん、で結構ですよ。それで——キーノさんでしたね」

ありんすちゃんは首を振りました。

「違うでありんちゆ。ありんちゆちゃはありんちゆちゃでありんちゆ。キーノなんて名前、知らないでありんちゆ」

「それで恐縮なのですが、この都市で何があつたのかを、貴方が知る限りで構いません、教えてくれませんか？ 勿論、お礼としてマジックアイテムや金銭をお支払いするつもりです。どうでしょう？」

お礼という単語にありんすちゃんは目を光らせて悟を見つめました。ですがありんすちゃんには説明出来る情報はありません。

ふとありんすちゃんの視界に城が映りました。途端にありんすちゃんは城に行つてみたくて堪らなくなりました。

「お城行きたいでありんちゆ」

「お城ですか？ ……成程。あそこに家族がいる、というわけですね。わかりました。行きましょう」

悟はありんすちゃんの手を握ると歩きだしました。

※ ※ ※

「どなたかいますか？」

警戒の為に召喚したドッグ・ゾンビを先行させながら悟とありんすちゃんは城内を進みます。

城下で見かけた兵士のゾンビの姿は一切なくあたかも無人のように静まり返ってしまいました。

「……お城でありんちゅー！」

興奮したありんすちゃんが走りだし、奥の厳めしい扉を勢いよく開けました。

「!!!」

部屋の中にいたアンデッド——ナイトリッチと目があった悟は——

「はじめまして。私は鈴木悟と申します。もしかしてこちらのキーノさんのご家族の方でしょうか？」

ナイトリッチは懇慫に挨拶をする悟を不思議そうに眺めていましたが——

「ヴアーミリオンのノヴァ
へ朱の新屋へ」

ありんすちゃんの魔法攻撃により、一瞬で燃え尽きてしまいました。

「——ええー?」

一仕事終えたように満足そうな笑みを浮かべたありんすちゃんは……

「危なかつちやでありんちゆ。ありは危険が危ないでありんちた」

「……成程。確かにこのナイトリッチは他のゾンビと違いますね。もしかしたら都市の住人がゾンビになった原因かもしれません。少し調べてみましょう」

悟は手際よくナイトリッチの持ち物を床に並べていきます。

「まずはこの羊皮紙の束から調べてみましょう。あのアンデッドの正体や目的がわかればゾンビになった人々を救う手段がわかるかもしれません」

ありんすちゃん言われるがままには変な臭いのする羊皮紙の巻物に手を伸ばしました。すると悟は止めようとします。

「ん? いや、罨について調べましたか? 魔法的な罨がある可能性が……」

悟がありんすちゃんに説明します。ありんすちゃんは呪文を唱えました。

「うえ、うえ、した、した、ひだり、みぎ、えー、びー……こりで大丈夫でありんちゆ」

ありんすちゃんは羊皮紙の束をつかんで拵けてみました。

「えとえと……ありんちゆちやには読めないでありんちゆ」

「……では、このアイテムを使ってみて下さい」

悟はアイテムボックスからマジックアイテムのモノクルを取り出してありんすちやんに渡しました。

「…………えとえと…………は、…………の…………の…………に…………である。読めたでありんちゅー！」
残念ながらありんすちやんにはひらがなしか読めませんでした。

悟は気を取り直して他の回収したアイテムを床に並べていきます。

「では、このアイテムを見てもらえますか？」

「わかつちやでありんちゅー」

ありんすちやんが頭をぶんぶん振って頷きました。

「これらのアイ——」

「——あー！」

ありんすちやんが一つのアイテムに駆け寄ると、そのアイテムを抱きしめました。

「こりはありんちゅちやの！ 前から欲ちかつちやでありんちゅー！」

ありんすちやんは羽がついた可愛らしいワンドを抱きしめています。

「それがゾンビになった皆を救う事が出来るかもしれない蘇生のアイテムですか」

「ちがうでありんちゅ。魔法少女リリカル☆ありんちゅの杖でありんちゅー」

ありんすちやんはワンドを構えてポーズを決めてみせました。するとワンドの先の

羽がチカチカと光ります。

悟はため息をつくと他のアイテムを調べ始めました。

“イルビア・ホルダンの仮面”、ローフ・オウ・ファーストインベルン “建国王の長外套”、ガントレット・オフ・グリフオンロード “驚獅子王の爪”、

そして……大きな水晶を加工したような透明な短杖、ワンド “虹よりこぼれし白”。

悟の見立てでは、込められている魔法は信仰系第五位階魔法〈死者復活〉のようでした。

ありんすちゃんに話しかけようとした悟は思わず破顔しました。なんとありんすちゃんはワンドを抱きしめたまま、すやすやと眠っていたのです。

仕方ありませんよね。だって、ありんすちゃんはまだ5歳児位の女の子なのですから。

悟は気持ち良さそうに眠るありんすちゃんの側に腰をおろしてぼんやり待つ事にしました。

※ ※ ※

「……ムニヤムニヤ……おちっこ」

ありんすちゃんは突然ムクリと起き上がるとトテトテと駆け出しました。

「……おトイレはどこでありんちた？」

「……さあ？」

ありんすちゃんは半分寝ぼけた状態で〈ゲート〉を開きます。ありんすちゃんと悟は城下にやって来ました。

「……ああ、城下ならゾンビ化した兵士で実験が出来ますね」

悟はゾンビになっていた兵士を捕らえるとすぐさま息の根を止めさせて復活のワンドで蘇生させてみました。

しかしながら残念ながら復活した兵士はゾンビのままでした。

「……残念ながらゾンビとなった人達をもとに戻す手段は現在の所、無いようです。……しかしながらこの状態を起こした元凶にたどり着いたら……あるいは何かしらの手段があるかもしれません」

ありんすちゃんは城下にあつた公衆トイレで用をすますと、爽やかな表情で頷いてみせました。

「……こりから冒険するでありんちゅ！」

ありんすちゃんは悟と手を繋ぎインベリアル王城を後にするのでした。

尚、王城の奥ではキーノの父母であるインベリアル王と王妃が二人のメイドと共にゾンビとしてさ迷い歩いていましたが、二人の知るところではありませんでした。